

---

# **エンジェルティアの最強執事**

聖幻童子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンジェルティアの最強執事

### 【Zコード】

Z2623Y

### 【作者名】

聖幻童子

### 【あらすじ】

不良の俺、竜堂政宗は高校を中退したその日に車にはねられ変なジジイに異世界へ転生させられる。そこで俺は、その国の王女であるシンデレラ美少女の執事になつていた……。つて、ちょっと待て！

普通異世界転生って、勇者になつて剣とか魔法で魔王倒すんじゃねーの！？ ところが、ゆるふわ不思議お菓子系ロリロリ侍女やアマゾネスみたいなドS筋肉女剣士、フェロモンむんむんの美熟女王妃様や眼鏡ボクつ娘公爵令嬢やらが現れて俺はモテモテハーレム状態に。いや、ちょっとこれ、ヤバくねえ？ｗｗ 喧嘩上等最強執

事ここに見参！世の中舐めきつてますが、何か？w（かなり  
きわどいエロシーンが出てくる恐れがあります。苦手な方はご注意  
ください。また、ゆるゆる不定期更新ですが話もゆるゆる日常系で  
進みます。それでも必ず完結させますので、よければお付き合いく  
ださい）

## 第1話 ハゲジジイ

「おらあ！ こんな学校、いひちから辞めてやらい！」

俺は折れたモップの柄を振り下ろし、窓ガラスを次々と割つていく。遠巻きに眺める女子の悲鳴が、俺の逆立つた感情を余計に刺激する。

「こらう、竜堂！ やめんか！」

柔道部顧問の体育教師が、俺を背後から羽交い締めにする。放せよ、タバコ！ ぶつとばしてやる…」

こうして俺は一年半の高校生活に終止符を打つた。

世の中ウザえことばっかだ。クソ親は俺のことをクソ溜めの汚物みてえな田で見るし、クソ教師どもは学校の体裁ばっかり気にしやがる。

周りのヤツらは飼い慣らされた豚みてえに大人しく、俺には何もかもが色褪せて見えた。

大学教授をしている親父は何かにつけて俺と兄貴を比較した。

兄貴は常に成績優秀で優等生。一流大学にトップで入つてエリート街道まっしぐら。

母親の口癖は「あなたもお兄ちゃんみたいだつたらねえ」だ。

「けつ…」

道端に唾を吐き、ポケットの中のタバコを取り出す。くわつ、空だし。

俺は不正入手したタスホでタバコを自販機で買おうとしたが、財布に一百円しか入つていないと気づく。

「くわつ…」

蹴った空き缶が歩道を転がつていく。夕暮れ時の町に空き缶の高い音が響き、塾に行くらしい男子中学生が怯えた表情で立ち止まっている。

「なんだよ、うらあ！」

金がねえならカツアゲでもしようかと、その中学生へ近づいていく。

「ひつ！」

踵を返して走り出すその中学生を追つて、俺も走り出す。  
くつそ、速えし！

日頃二口チン瀆けになつてゐるだけに、すぐに息が上がりてしまつ。これでも中坊の頃は陸上部に勧誘されたぐらいなんだから。  
逃げる中学生を追つて角を曲がると、いきなり目の前に夕暮れの赤い空が広がる。

車にはねられたのだと気づいた時、俺の頭には今までのくそったれな人生がまさに走馬燈のように流れてきた。

ああ、つまんねえ人生だつたなあ。

今度生まれ変わつたら、もう少ししましな人生を送りてえもんだ。

……つて、あれ？

いつまでも夕焼けの赤い空が広がつてゐる。まるで時間が止まつたように景色が固定されている。俺はいつの間にか黄昏の空の真つ只中に浮かんでいた。

死んで魂だけになつちまつたのかな？ まあそれもいいか。痛い思いするよりいいし。

妙に達観した気持ちになつていて、目の前に白い光が現れた。それは次第に強くなつていき、中からハゲたジジイが出てきた。

「ふおつふおつふお、見事にはね飛ばされおつたのう」

「なんだジジイ」

そのジジイは真つ白いシーツのような布地を着ていた。そつまことにシーツの真ん中に穴を開けて、そこに首を突つ込んだような感じだ。服つつーより、布だな。

頭には毛は一本も生えてなく、眉毛と口ひげも真つ白だ。

右手に持つた木の杖の上部は歪に膨らんでいて、仙人か魔法使い

といった感じだ。

「これ！」

右手に持った杖で頭を叩かれる。

「痛えつ！ つて何で痛えんだ？」

「年長者は敬え、このバカモングが」

「おいハゲ、質問に答える。こにはなんだ？ 俺は死んだんじゃねえのか？」

「ハゲたくてハゲたわけじゃないわい！ まったくこれだから地球の若者は好かん」

「地球？」

そう思つた時、じのジジイが普通と違うことに気がついた。全身が淡い光に包まれ、瞳が澄んだ水色をしている。明らかに日本人じゃねえ！

「お、お前神様か？」

「ふん」

ジジイは鼻息を荒くして、口ひげを揺らす。

「そう思つならそれでも構わん。とにかく貴様には選択してもらわなければいかん」

「選択？」

周囲は相変わらず黄昏の空だ。俺とジジイは空中に浮かんだまま静止している。呑かれて痛いってことは、これ夢じゃねえんだよな？

「じのまま地面に叩きつけられぐけやぐけやになつて死ぬか、生き残るチャンスを得るか…… ジヤ

「よし、死ぬ！」

「ぶつ！」

ジジイは瞳を飛ばす。

「き、汚ねえ！ なにすんだよ！」

「貴様はどうしようもないヤツじやの！」

ジジイは長くて白い眉毛を下げる、俺を哀れみの目で見る。

「チャンスとかめんじくせえ。じうせ生きてたつていいことなんか

ねえし、さつさと死んで生まれ変わった方がよっぽどいい」「生まれ変わったらミミズじゃつたりしてな」

「う……」

それは想定外だった。

「蚊とかに生まれ変わつて叩きつぶされたりしたりの」

「うう…… それは…… イヤだ」

「じゅるう?」

ジジイのドヤ顔がめっちゃムカついたが、ここは一応大人しく話を聞いておこう。

「チャンスってどんなんだよ」

「なあに、簡単じやよ!」

ジジイは途端に顔中をしわだらけにして二口二口する。くそつ、ぶつとばしてえ。

「美少女を一人助けて欲しいんじやよ」

「美少女?」

俺は思わず身を乗り出す。俺はいつ見ても彼女いない歴=年齢だ。

「うむ。さすれば貴様は生き残れるじゃん?」

「よし、乗つた!」

「ぶつ!」

ジジイはまた唾を吐ぐ。飛沫が顔に掛けかって、俺は思いつきり学ランの袖で拭く。

「汚ねえからいちいち俺の顔に吹き出すなつづーの!」

「お前は本当に軽いの。まあよい、詳しくは転生先で聞くがよいそういづとジジイは白い光の中へ溶け込むように薄くなつっていく。「お、おい、ちょっと待てよー。転生ってなんだよー。俺は何をすればいいんだよ!」

「一つだけ、貴様には特別な能力を『ねえておく』よく考えて使つがよい。ではなあ……」

ジジイの声にHマークが掛かって遠くなつていぐ。

「おー、ジジイ！ ハゲ！ おー、おー、おー、

途端に体ががくんと落ちる。

俺はそのまま床を飛び跳ねても落つてこつた。

## 第2話 メイドと犬と眉毛

ぼやん。

ん?

ぼやんぼやん。

んん?

ぼやんぼやんぼやん。

何か柔らかくていい匂いがするね。

「う……」

「あ、気がついたですぅ」

田を開けると俺の田の前におっぱいがあった。

「うわっふ！」

慌てて頭を上げると、白いエプロンに包まれた巨乳に頭が跳ね返された。

「あん、急に起きあがってはダメですぅ」

日曜の朝やつてる美少女アニメキャラクターのような声がして、俺の頭がまた柔らかいものに載せられる。フリル付きのエプロンに包まれた一つの巨大な盛り上がりの向こうに、丸い目をしたまん丸い顔の美少女がこっちを見下ろしていた。ほつかむりのようないい帽子の向こうに、青空が広がっているのかわかる。ツバメのような鋭角なシルエットを持つ鳥が一羽、白い雲を横切って飛び去っていく。

「え、ええっと……」

どうやら俺はこの美少女に膝枕されてるらしい。なにこのいきなりの萌えシチュ。

「あは、さわさわの髪の毛心地よいですぅ」

俺は頭をなでなでされている。

ここはどうやら野原の真ん中のようだ。お乳、いや落ち着いてく

ると周囲に草の匂いが満ちている」と『氣づく』。遠くで犬の鳴き声がして、美少女は撫でる手を止める。

「ゆっくり起きあがるです」

奇妙なしゃべり方をするこの女の子は、どうやら俺を介抱してくれていたらしい。

俺の頭の中にハゲジジイの声が蘇つてくる。

『美少女を一人助けて欲しいんじゃよ』

『詳しくは転生先で聞くがよい』

「あ、あのよ……」「ここはどこだ？」

「次は『わたしはダレ』って続くのです」

イラッ！

「いや、自分がダレかはわかつてゐつて。お前こそダレだ？」

「うちはショコラです」

「いや名前言われても」

少し心残りながら上体を起こすと、周囲の様子が漸く把握できた。どうやらやつぱつとは野原のようだが、少し傾斜している。緩やかな山の斜面のようだ。周囲には赤や黄色の花々が咲き乱れ、季節はどう見たつて春。晚秋の日本ではない。学ランでは暑いくらい暖かく、俺は明るい陽射しに目を細める。

野原は校庭より少し広いくらいで、周囲は杉のよつた針葉樹林に囲まれている。森の中に開けた花畠のような場所だ。

女の子は満面の笑みで俺を見つめている。見た目はどう見ても、メイド喫茶のアルバイトコンパニオンだ。野生のメイドか？歳は中学生くらいだから、バイトはできないだろうけど。

脇に置かれた籠の中には、周りで咲いている花と同じものが数本横たえられていた。

「え、ええつと、ショコラつったか？ここは何ていう場所だ？」

「ここはエンジェルティア王国です。貴方は勇者さんですねえ？」

「え？」

目が点になつた。

「勇者マサムネさんではないのですかあ？」

「な、なんで俺の名前知つてんだ?」

「あは、やつぱりですか」

「むぐづー。」

豊満な胸に抱きすべめられた。う、嬉しいけど苦しい。

「ちよ、もが、待て、ちよおつと待てー。」

「あん、そんなとこ触っちゃダメですか。怒られるのです」

俺はどうあえず乳地獄から脱出する。

「ふつ……ふつ…… ゆ、勇者ってなんだよ。なんでお前は俺の名前知つてんだ?」

ショコラといつこのメイドコス美少女は、満面の笑みでうるうる頷いている。

「言ひ伝えの通りなのです。王国の危機に、神官のよつな黒い衣装を着て現れるのです。」

ショコラは豊満な胸で両手を組んで、手に星様をこなしてキラキラさせて俺を見つめている。

「王国の危機で勇者? つまり俺は、ロープレの主人公になつたつてことか?」

「ろーふれ?」

ショコラは小首を傾げる。俺は巨乳好きだけじロツコンじやないから胸がキコンとはしない。このドキドキはこれから始まる冒険への期待だ。たぶん、きっと、おやぢや。

「そつかそつか!」

俺は尻や背中についた草つきれを払いながら立ち上がる。

「そんじゃまず国王様に会わないとなー。」

「あは、話が早いです」

ショコラは籠を持つて立ち上がる。つてちつちええ! この娘の身長は、百七十八センチある俺の肩にも届かねえくらい小さい。胸は発育いっけど、やっぱ口リだな。

「じゃ、うちがお館まで案内するです」

「おう！」

てとてと歩き出したショコラの後について、俺はワクワクし始めた。

これから俺は国王様に会つて、伝説の剣とかもらつて冒険の旅に出る。ジジイの言つてた「美少女」つてのは、この娘ではないはずだ。俺はそんな単純じやねえ。おそらく悪い魔王に囚われていて、勇者の俺が颯爽と助け出す。そんで魔王を倒して世界を救っちゃつたりなんかしちゃつたりして、美少女と結ばれるんだな。

くうう～、いいねえ！

俺が握り拳で気合いを入れていると斜面の下、森の方から犬が走つてくる。さつきの鳴き声はこの犬か。

「あ、マサムネだ」  
「は？」

今なんて？

「勇者様がいつか現れてくださるよう」、うちが名付けたですう。  
「マサムネ～！」

ショコラは大きく手を振りながら走り出す。犬と名前が同じつてどうよ。この娘はどうやら天然系の不思議ちゃんらしい……かわいいから、まあいいか。

「わんわん！」

「マサムネ～！」

飛びついてきた犬（マサムネ、推定）を、ショコラがしゃがんで抱きしめる。ちょっとだけ羨ましいと思ったのは内緒だ、ってえええつ？ 俺はマサムネ（犬、現在腰を振っている）を見て驚愕した。

「な、なんだその犬！ ま、眉毛あんじやん！」

なんと薄茶色で尻尾の大きなその犬（マサムネ、推定雑種）には、ふさふさとした逞しい眉毛が生えていた！

「へ？ 犬には普通眉毛があるですか？」  
「ねえよ！」

俺はこの異世界のことを、まだ何も知らないのだった。

### 第3話 危険なドラゴン

「らんらんぬー」

「はあ」

「わんわん」

半分スキップしながらシヨコラはずんずん森の小道を歩いていく。マサムネ（犬眉毛付き）は、時折俺の方を振り返つて凜々しい顔で様子見をする。

「キリッ」とか擬音が聞こえてきやうで、その顔を見るたびにイフツとする。

「なあ、その“お館”つてのはどこにあんだよ」

「もうすぐですぅ」

「わん（キリッ）」

イラッ！

森の木陰道は涼しいが、普段運動不足プラス二コチン漬けの俺にはけっこう堪える。そういうえばタバコ買えなかつたなあ。

犬つころにいちいちイライラするのは、きっと禁断症状だ。この国にタバコかそれに代わるものつてあんのかな。

「なあ、ショコラつつつか」

「はいですぅ」

「わん（キリッ）」

「いちいちお前が返事すんな！ なあ、お前あんなとこひどにしてたんだ？」

「あは、お花を摘んでたですぅ」

「花？」

まるで童話の世界だな。魔王に世界を滅ぼされようつて時に、こんな小さな女の子一人で山なんかに花摘みに出ていいのかよ。

「うちは王女様専属の侍女なのです。お花を王女様のお部屋に毎日飾るのは、うちの大切なお仕事なのですきりつ！」

「王女？」

何か話が違つてきたぞ？

「王女つてあれだよな、国王の娘」

「あは、勇者様は面白いのですう。他に王様つて呼ばれる方はいらっしゃりしゃらないのですう」

「わん（キリックスツ）」

「あ、い、今この犬笑つたぞ！」

マサムネ（犬畜生）は、口の端を持ち上げて牙を見せた。あの表情は絶対に笑顔だつた。しかも不敵な。

「あはは、犬が笑うわけなのですう。マサムネは楽しい時には尻尾を振るですう」

「いいや、絶対笑つた！　この犬絶対笑つたつて」

「あそこがお館ですう」

俺の主張を華麗にスルーしたショコラは、森の切れたところで下方を指さす。そこにはまさに大豪邸と言つて差し支えない建物とそれを取り巻く綺麗な庭が一望できた。

「で、でけえ」

「ここから見える範囲は、ぜんぶ国王様の私有地なのですう」

「ま、まあ一国一城の主だからな。そ、そんくらい金持ちなのは、当たり前だよな」

正直俺は氣後れしていた。今までの十七年間の人生の中、いわゆる上流階級と呼ばれる人種との接点は一切なかつた。せいぜいテレビで見る豪邸訪問やセレブタレントぐらいだ。

「“いちじょう”ってなんなのですかあ？」

「かあ、お前そんなことも知らねえのか？　一城つつたら城に決まつてんだろ。お城だよオ・シ・ロ！」

「おしろ？　マサムネ知つてるですかあ？」

「クウ～ン」

「こいつ城も知らねえのか？　そんなんで魔王の攻撃をしのげると思つてんのか？　やつぱりここは、勇者の俺が城の造り方から教え

てやんねえといけねえらしいな。

そつは言つても、俺に築城の知識なんかあるわけもない。小学生の時、一時期クラスで流行つたプラモデルの大坂城作つたくらいだしな。

まあいいか、國を守るのは王様の役目。勇者の俺はぜひせすぐ旅に出ちまうんだからな。

「おし、さつさと行こうぜ！　だいたい一キロつてどこか？」

「“さる”つてなんですか？」

ちつ、単位まで違うのかよ。これだから異世界はめんどくせえ。

そんくらい融通効かせとけよな。話が長くなつちまうじゃねえかよ。

「あ～、俺のいた世界での距離の単位だ。こんくらいが一メートル、その千倍が一キロメートル」

「ふうん、変わった単位ですねえ」

「こりじやなんて言つんだよ」

「こりはヤード・ポンド法です」

「ふうん、そうか……　つて、めっちゃ共通点あんじやねえかよ！」

「あはは、冗談ですう！　メートル法も通じるです」

ショコラは笑いながら、マサムネ（犬、現在こいつを見てまたクスッと笑っている）と坂道を駆け下りていく。

「くつそ、待てごるあつ！」

俺は半分マジでキレて追いかける。あれ？　何か大事な話の流れがあつたような……　そんなことが一瞬ちらつと頭をよぎつたが、すぐに俺は忘れ去つてしまつていた。

坂道の下の林を抜けると、かなり広い芝生に出る。ここはさつきの野原の五倍以上は確実にある。まるでゴルフ場だ。しかしゴルフ場にしては、そこら中やたらと穴が空いている。といつてもそれほど大穴ではなく、大きめのスコップで掘つたくらいの小さな穴だ。さらにでかい糞が落ちている。明らかに人間のじやなく動物のだ。しかもかなり大型の。かなり臭えんじやねえかと思ったが、思った

よりは臭くない。どちらかというと、草の匂いに似ている。

ショコラとマサムネ（犬、すでに俺の存在は忘れているようだ）は、楽しそうに先を走っていく。ちょっと待て、勇者様を案内するんじゃなかつたのか？ こんな糞だらけの場所に置いてきぼりにするつてどういひ…… ん？

俺はいきなり辺りが真っ暗になつたことに気づく。すると突風が頭上から吹き付け、芝生が一斉に同じ方向へ倒れる。

「う、うわっ！」

「ぎょええええつ！」

甲高い鳴き声がして頭上を仰ぐと、空から青いドラゴンが下降してきた。つて、ええええつ！ ド、ドラゴン？

体長五メートル、翼長十メートルほどのブルードラゴンは、俺の前に重々しい音をさせて着地する。青い鱗が日の光をきらめりと反射して、すこく綺麗だった。

ドラゴンはぎろりとした目で俺を見つめ、広げていた口ウモリのような膜でできた翼を置む。俺の腕ほどもある長い三本の爪を芝生に突き刺し、ゆっくりと長い首を持ち上げる。

ああ、周りに空いてた穴や糞は全部こいつのだつたんだな。

俺は金縛りにあつたように身動きが取れない。恐怖もあつたが、何よりも驚愕が一番大きい。非現実的なその存在感は、巨乳口リ美少女の膝枕や眉毛のある犬より圧倒的にここが異世界だということを教えてくれる。

「わん」

気がつくとマサムネ（犬、怯える俺をドヤ顔で見上げている）が、俺の足に胴体を擦りつけていた。

「あはあ、ここはドラゴンの発着場なのです」

ショコラが満面の笑みで戻ってくる。

「は、発着場？」

つまりこの恐ろしい生き物はこの世界の人間が飼い慣らしていく、しかも乗用してくるらしさ。ま、まじかよ…… 俺はドラゴンが今

「」もファイヤーブレスとか吐くんじゃないかとドキドキしていった。  
「」いつ時は急な動きをしちゃいけねえんだ。そんで、田は合わ  
せない！

「ドラゴンはとっても大人しい草食動物なのですから、危険なことは  
ないのです」

シヨコラはそのままドラゴンの前足を撫でる。

「ぐう～ん」

ドラゴンは甘えた声を出し、シヨコラへ鼻先を擦りつける。  
「なんだ、めっちゃ安全な生き物じゃねえか。ビビッて撲したぜ」  
「もうですか、ドラゴンは絶対に人を襲つたりすることはないんで  
すう」

そう言われるどラゴンにも愛嬌を感じ始める。つとも、ドヤ  
顔する眉毛のある犬よつよつぽど安全で可愛いヤツだ。

「」の子の名前はベクレルっていうですか？

「名前はめっちゃ危険じゃねえか！」

「あ、ブルトーウムも来たですか？」

俺は空中で着陸態勢に入った赤いドラゴンを見ながら、軽い目眩  
を覚えていた。

## 第4話 王様と王妃様

「ほうほう、そなたがマサムネ殿ですな！」

俺の前では、派手な服を着た恰幅のいいオッサンが満面の笑みを浮かべている。オッサンの名前はラグラシエ＝エンジエルティア。つまりこの国の王様だ。

俺はショコラに連れられ、宮殿みたいなドケイ建物に来た。薦の絡まる白亜の建物は、年月と威厳を感じさせた。本物のメイドさんが忙しそうに動き回る中を歩き、奥まつた広い部屋に通された。ショコラによれば「謁見室」というらしいが、現代日本風に言えば「応接室」のようなものらしい。ショコラいわく、「王様とお話しするお部屋ですぅ」ということだ。

腰まで沈み込むほどふかふかのソファに座つて三十分ほども待たされると、王様と王妃様らしい人たちが俺の前に現れた。

王様は一コ二コと人の良さそうな笑顔で俺に握手を求めてきたが、王妃様の方は妖艶に微笑んだまま王様の後ろに立っていた。

つてかすっげえ美人だし！  
派手な服着たメタボ中年にしか見えねえ王様が、よくこんな美女と結婚できたのか不思議でならなかつた。

大きなアーモンド型の目には、バツサバサ動く黒いつけまつげが翼のように付いている。卵形の顔は愛らしいが、真つ赤に口紅の塗られた肉厚の唇はかなり情熱的な印象を受ける。口元のほくろも色っぽい。

胸は間違いなくGカップ以上はあるだろう。ワインレッドのスパンコールがきらきらするドレスの胸元からは、恐竜の卵みてえな谷間が「こんにちは」している。

きゅっと締まつたくびれと豊満な尻。あれに比べたら、ショコラの膝枕なんて低反発枕だな。もはや何を言つていいのか自分でもわからなくなってきた。

とにかく非常に妖艶でフローロモンバリバリな王妃様なんだが、いかんせん歳がいきすぎてる。俺に熟女趣味はねえ。いくら美人でグラマーでも、オバサンはちょっと勘弁だ。

「マサムネ殿？」

「オッサ……もといエンジェルティア王が不思議そうな顔で俺を覗き込んでいた。いかんいかん、集中しないと。」

「あ、ああ、すんません」

俺は王様に頭を下げながらも、俺を見ている王妃様の艶っぽい視線が気になつてしまふがなかつた。

「で、ショコラが発見したということですね」

いつの間にか王様の話は始まつていたみたいで、俺は前半部分を完全に聞き逃していた。

「は、はあ」

王様は俺のテーブルを挟んで対面にあるソファにでつぱりと座り、丁寧に整えられた口ひげを揺らせている。口を動かすたびにふるふるするもんだから、気になつてしまふがねえ。

「それで、貴方はどこからいらしたのかしら？」

王妃様が俺から目を放さず、色っぽい声を出す。つまづ、やつぱり見た目通りの声だな！

「えつと、に、日本っす」

「日本？ それはどこにある国ですか？」

「ええつと、たぶんこことは違う世界です」

「違う世界？ 異世界ですか？」

俺にとつてはこじが異世界なんだけど、まあそういうことなのかな。

「とりあえず俺は頷く。」

「ふうむ、即座に信じるのはできませんがそんなこともあるのかもしれませんな」

「中坊追つかけてたら車に撥ねられて、変なハゲジジイに美少女を

助けたら命を助けてやるってドヤ顔で言われて気づいたらショックに膝枕されました

王様と王妃様は唖然として俺を見つめている。入り口の脇に控えている派手な服を着た護衛の兵士らしきヤツが、若干身動きする。

「あ、あ……」

王様は椅子から腰を浮かし、俺の方へ身を乗り出す。な、なんだよ?

「も、もしかして、その『じ』老人はあの方ではなかつたですかな?」  
王様は俺の後ろを指さす。入ってきた時は気がつかなかつたが、俺の後ろの壁には天井に近い位置にあのハゲジジイの肖像画が掛かっていた。妙に偉そうな顔にイラッとした。

「ああ～！ そう、そつす！ こいつす！」

俺は立ち上がりジジイの絵を指さす。

「やはり！ いや、あなたのおっしゃることを信じますぞー！」

王様は興奮して、またもやヒゲをふるふる揺らしている。顔は興奮して真っ赤だ。

「あなたが救世主だつたのですな！ いやはや！ 身なりは言い伝えの通りでしたが、このような若い方だとは思いも寄りませんでした！ 疑うような質問をしてしまい、失礼しました！」

王様は俺の両手を握つて激しく上下させる。

「わたつ、わたたつ！ そ、そつすか、それはよかつたつす。ん でのジジイなんなんすか？」

「あの肖像画の方はポニャック＝エンジエルティアと言い、わしの三世代前の国王になります」

「な！ んじやあ、神様じやねえのかよ！」

あんな現れ方するから、俺はてつきり偉い神様かなんかだと思つちまつたぜ。まあ全然偉そじやなかつたけどよ。それにしてもポニャックつて！ 今度会つたらバカにしてやろつ。

「いやいや！ ポニャック王はこの国開闢以来の大魔法使い様でしてな。特に召喚魔法においては、まさに神の領域に達しておられた

方だと聞いております

「あのハゲジジイがあ？」

召喚魔法とやらが何のことか知らねえが、俺をこんな世界に連れて来るぐらいだからまあ確かに変な力はあるんだろうな。まああんなジジイのことはどうでもいい。それより美少女だ。

「そんで俺が救い出す美少女って、どこに囚われてんすか？」

「囚われる？」

王様の動きが止まる。王妃様の微笑が消え、眉間に若干シワが寄る。ちょ、その顔まじで怖えつすよオバサン。

「姫は囚われてなどおりませんぞ？」

「へ？」

その時部屋の扉が勢いよく開かれ、金髪碧眼の絶世の美少女が入つて来る。その後ろでは、扉にノックダウンされた兵士が目を回して倒れていた。

## 第5話 伝説の始まり

「お父様！」

美少女は切れ長の皿をさりと吊り上げ、細い肩を怒らせてずかずかと足音を立てて突き進んでくる。どうやら何かにかなり腹を立てているようだ。

「あの男はなんなんですか？『君は宝石のように美しい』だなんて！わたくしを鉱物資源に例えるなんて、デリカシーがないにも程がありますわ！」

「こ、これ、レオナ！　お客様がいらっしゃるのにしきなり失礼ではないか」

王様は慌てて立ち上がる。

お父様ってことは……まさかこの美少女が王女様？　あれ、何でここにいんだ？

レオナと呼ばれたその美少女は、俺の方をちらりと見ると「フンッ！」と鼻を鳴らす。

「こんな小汚い男が客だなんて、お父様もお暇なのね！　とにかくあの男はさつさと首にしてください、いえ、首では生ぬるいわ。一族郎党皆殺しよ！」

「まあまあレオナ、話をしよう。マサムネ殿、すまぬがこの後の話はフィオーナに聞いてくだされ」

果然と立ち尽くす俺を置いて、王様は頭から湯気を出していそうな王女の肩を抱いて部屋を出て行ってしまう。扉が閉まる後に残されたのは俺と王妃様、そして氣を失ったままの兵士だけだった。

「ふう、びっくりなされたでしょう？　とにかくまあお座りになつて」

「は、はあ

「誰か！」

王妃様はテーブルの上にあった小さな鐘を鳴らす。カラランカララン

と小気味良い音を立てると、奥の小さな扉からメイドさんが出てくる。一瞬ショコラかと思ったが、違う女の子だった。

「お茶をここへ。ああ、あと侍医を呼んで、ラオスがまたノックアウトされたわ」

「恐れました」

ショートカットの黒髪をしたメイドさんは、丁寧にお辞儀をして足音をせずに出て行く。王妃様は振り返ると、微笑みながら俺を見る。

「じめんなさいねえ、いつものことなのよ」

「あ、あの、話が見えないんすけど……」

「そうですわね。お茶を飲みながらゆっくりお話ししますわ

「は、はあ」

もう俺は「は、はあ」しか言えない人形になつた気分だ。

王女は確かに美少女だったが、魔王とかに囚われるわけじゃなかつた。それどころかめっちゃわがまま娘のようだ。いくら美少女でもあれは勘弁だな。よほびドM趣味じゃない限り、あの性格じや精神ズタボロにされちまづ。

メイドさんがピカピカに磨き抜かれたワゴンを押して部屋に入つてくる。俺と王妃様はメイドさんがお茶を淹れ終わるまで黙つて座つていたが、メイドさんが一礼して部屋を出て行くと王妃様は改めて口を開く。

「さて、申し遅れましたがわたしこの国の王妃、フイオーナ＝エンジエルティアと申します」

「は、はあ」

俺はぎこちなく座つたままお辞儀する。この国の王妃様なんて偉い人なんだから、本當は立つてお辞儀しなきやなんないだろう。でも俺はこの國の国民じゃない。いや、この世界の人間ですらない。なので王様が言つたように、あくまでもお客様として対応すべきなんだろうな。とりあえず。

「まずは、王がおつしゃつていた『救世主』についてです

「は、はあ」

「この国は非常に危険な状況に追い込まれています」

「は、はあ…… って、はあ？」

「おし… ゆうやく話が進んできただぞ。

「あれっすか？ 悪い魔法使いに滅ぼされようとしているとか、強いドラゴンが暴れまくつてるとか」

「いえ、我が国はそういう意味では非常に平和、平穏無事でおりますわ」

「あれ？」

俺はがっくりする。んじゃなんだってんだよ。

「危険な状況というのは、わたしの娘…… レオナです」

「は、はあ」

やっぱこれしか出ねえな。俺は田の前で湯気を立てる上手そうな紅茶らしき飲み物を一口飲む。

「熱つ！」

「（）覧の通りとでも…… いえ非常にわがままでじやじや馬でおひんばです」

「はあ、そんな感じっすね」

「遅くに授かつた一人娘で、わたしも王もレオナを田の中に入れても痛くないほどかわいがつて育ててきました」

「いや田ん中入れたら痛いつすよ、普通」

「おだまき」

「はい」

ひえつ、一瞬空気が凍つたぞ？ このオバサンには冗談通じねえんだな、よく覚えておこづ。

「それで成人するに当たつて、王は社交界や政財界へ出ても恥ずかしくないように教育を施すことにしました」

「いわゆる家庭教師っすか？」

「最初は…… そうでした。しかしそれも一週間経たずにすべて辞めてしまいました」

「それは…… 辞めさせられたってことっすね」

王妃様は頷く。まああの調子じゃ相当わがまま言つて困らせたんだろうな。『愁傷様だな。

「ところがレオナのわがままはわたしたちが思つた以上でした」

王妃様は綺麗に整えられた眉根を寄せる。それが妙に艶めかしくて、俺はこつそり生唾を飲み込む。

「家庭教師に留まらず、身の回りの世話をする侍女たちにも当たり散らすようになったのです」

「ははあ、あれっすね。ハツ当たり」

王妃様は少し首を捻るが、小さく頷く。

「まあそんなところでしょう。家庭教師たちのやり方にも問題はあつたのでしきょうが、レオナのストレスはかなり大きいのです」

「ストレス…… つすか」

まあそれは俺もよくわかる。それで大暴れしちまったしな。

俺はその時初めてあの美少女王女に同情した。

「今では王女の身の回りの世話はショコラ一人。護衛でさえ女性の剣士一人しか認めません」

「後はみんなこれっすか？」

俺は手を首に当てて横に引く。つまり「クビ」って意味だ。

王妃様は頷くのとため息をつくのを同時に行う。白く巨大な谷間がふるふると揺れ、俺の目はそこに釘付けになつてしまつ。

「我が王家にはポーヤック王の予言があるのです」

「予言…… つすか」

王妃は俺を潤んだ瞳でまつすぐと見つめる。ちよつと恥ずかしくなつちまって、俺は若干視線を逸らす。

「『王女を立派な淑女として成人させないと、この国はいづれ滅びるであろう』…… と。そして『マサムネといつ名の神官のようないつ黒衣を着た異世界からの男が、この国を救うだ』とも」「えええっ？」

あのジジイ、俺をこの世界に送ったのはそういうことだったんだ

な！

変な力のあるあのハゲジジイのことだ。俺を送り込んだ後に、予言とやらを時間を前後させて変えるなんて朝飯前だろ。つまり俺をこの世界に送ることを決めた時、あいつは過去の予言を変えやがったんだな！ 俺にはジジイが舌を出す光景が目に見えるようだつた。

「予言は言い伝えとなつて代々受け継がれてきました。あなたが予言通りの救世主ならお願ひです。あの娘の執事となつてこの国を救つてください！」

「ええっ？」

こうして俺の『最強執事』伝説が始まった。

## 第6話 王女レオナ＝エンジェルティア

「レオナ様、お夕食の時間で」  
「レオナ様、お夕食の時間で」

俺は腰を四十五度の角度で曲げて、深々とお辞儀する。  
「要らないわ、食べたくないの」

俺の前には豪奢な金髪を波立たせた絶世の美少女が、つんとそっぽを向いている。彼女はレオナ＝エンジェルティア。このエンジェルティア王国という異世界の国の正統な王女だ。国王には正統な世継ぎがおらず、一人娘のレオナがこのまま成人すれば女王としてこの国の頂点に立つことになる。

「そうおっしゃらず、ぜひお出でください。国王様も王妃様も、レオナ様と夕食を共になされることを楽しみにしておりますよ」

「うるさいわね！ 要らないったら要らないのよ！」

レオナは豪華な一人掛けソファの肘掛けを強く叩くと、立ち上がってテラスへ通じる大きな窓際へと歩いて行つてしまつ。ちつ、ムカつく。でもここは我慢、我慢。

俺はこのわがまま王女の執事としてこのお屋敷で働き始めた。この一日間というもの、この娘には翻弄されっぱなしだ。

元々執事なんてやつたこともない不良学生の俺が、見よが見まねでやつても上手くいくはずはない。

執事……高位の家で家政や事務を執りしきる者。

俺はアンネラというメイド長に、一通りの仕事についてレクチャーを受けただけだ。とりあえず見た目だけはそれっぽくなつた。仕立てのいい生地のスーツにレース装飾のついた白いワイシャツ。清潔な靴下と磨き抜かれて黒光りする革靴。執事以外じゃホストにしか見えねえ。

俺に与えられた役割は、執事本来の仕事とは大きくかけ離れていた。

王女様を淑女にすること、物わかりのいい素直な女の子にすること

と。ただそれだけ。

本来なら国政に関わる事務仕事なんかもあるらしいが、そういうのはお屋敷の専門的な事務方がやってくれる。

身の回りの世話は女性のレオナには女性の侍女がつく。それがシヨ「ラ」だ。男の俺は侍女にはなれない。そうなると正式に教育係としてレオナに納得させるためには、執事という身分しかなかつたのだ。

勉強が苦手な俺としては、余計な仕事がないつてことはありがたかった。だがレオナを淑女にするつて仕事は、執事本来の仕事よりも遙かに難しいことだと身に染みてわかつた。

そう、まさに身に染みて。

俺は王女から数メートル下がった位置で、なおも食い下がる。今日こそこそは何か一つでもいうことを聞かせたい。

「レオナ様、今日はレオナ様の大好物である魚介類のパスタが出されるそうですよ？」

レオナは一瞬形のいい眉毛をぴくりと動かす。しかし一秒後には「フンッ！」しか返つて来ない。

俺は心中でドナドナを歌いながら、沸騰しそうになる頭を冷やす。

怒っちゃダメだ、怒っちゃダメだ。可哀想な小牛の目を想像しろ！ 涙を浮かべてふるふる小さな体を震わせて、荷馬車で送られていくんだぞ？ 売られちゃうんだぞ？ 哀しいよな？ 切ないよな？ だつたらその程度で怒んじゃねえよ、俺。

「だいたいあんたは何にもできなくせに、なんで執事なんかやつてるのよ！ 粗野で乱暴で変態で人外で野獸でオーケでトロルな変態よ！」

「レオナ様、『変態』が一度入つておりましたよ？」  
「フンッ！」

俺はこめかみをピクピク痙攣させ、口角を震わせながら何でもないこのような表情を取り繕う。本当は今にもキレそうだったんだ

が。

柔らかな布に包まれた豊かな胸が、荒い鼻息に呑わせてふるんと揺れる。ショコラほどではないが、レオナの胸も巨乳と言つていいくらいでかい。いやレオナの場合巨乳か。性格同様つんと上を向いた双丘の頂は、服の上からでも居丈高だ。

レオナは白いレース地の内着に、レモン色のフリフリのロングドレスを着ている。手には肘まである白い綿の長い手袋を嵌めていて、直に物に触れることはない。

じうじう少女漫画に出てくるような王女様は普通くるくるパーマでドリルもみあげだつたりするのだが、レオナの髪はストレートで背中の真ん中ほどまで長い。うなじのうしろでデカイ宝石をまぶした髪留めで一つに纏め、残りは馬の尻尾のように自然に垂らしている。朝晩とショコラに一時間近く手入れさせている自慢の金髪だ。

見た目は完璧にセレブ美少女。しかし中身は超絶わがまま娘だ。アキバあたりに行けばそういう王女様のヒールに踏まれて喜ぶ輩もいるだろうが、残念ながら硬派な不良を自認している俺にはそんなドM趣味はない。罵倒されて恍惚になれる変態ではないのだ……たぶん。

「あなたはブタよ、家畜よ、フンよ。生きる価値もないわ。だから今すぐここから出て行きなさい。いいえ、むしろ死んで」

「レ、レオナ様、そ、それは少し言い過ぎでは？ フンに至つては生物ですらありません。排泄物です、もはや死ねません」

「だったら畠の肥料になるなりすればいいわ！ その方がよっぽど世の中の役に立つわよ、この腐れ外道！」

俺は頭の中で何かがぶち切れた音が聞こえた。

「がああっ！ 黙つて聞いてりやこのクソアマ！ 言つに事欠いて腐れ外道だのフンだの、もう許せねえ！」

「フンッ！ ほら、そうやってまた本性を現したわね、野獸！ 許せないって、いったいどうするつもり？」

「力づくで言うこと聞かせてやるあ！」

俺は腕まくらしてレオナに近づく。するとレオナは右手を俺の方へすっと伸ばし、手のひらを向ける。

「マンティコア！」

「やべつー！」

ブチキレていた俺は我に返つて踵を返す。またやつちました！

俺の視界の端には、レオナの手のひらの真ん中に光るエメラルドグリーンの光が見えた。

次の瞬間、俺は巨大な獣の足で床に踏みつけられる。

「ふぎゃー！」

「ぐわおおうつー！」

俺を踏みつけたのは体長二メートルはありそうな人面ライオン。尻尾はトゲトゲのハンマーみたいになつてている。

レオナはなんと召喚魔法の使い手だった。ハゲジジイの劣性遺伝子がそつせせるのか、その能力はこの世界でもトップクラスだとう。どおりで今まで誰も言つことを聞かせられなかつたつてわけだ。俺はレオナの執事になつてから、毎回神獣やら幻獣やらの餌食にされていた。

「マンティコア、やつておしまいー！」

「ぐわおおおうー！」

「ぎゃあああー！」

俺はケツに食い込むモンスターの牙に意識が遠のくのを感じる。

「さ、魚介類のパスタをいただきましょ」

俺はカツカツとリズミカルにヒールを鳴らして歩いていくレオナの後ろ姿を見送りながら、伸ばした右手が力なく落ちるのを見た。

「もういつそ殺してくれ……

「ぐわおおおうー！」

「ぎゃあー！」

レオナの颶爽とした後ろ姿は、そのまま無情にも閉じられたドアの向こうに消えていった。

## 第7話 ハルザ＝アマンティア

「あああっ！ もうやつてらんねえ！」

俺は濃紺の空に瞬き始めた星空を見ながら、大きくため息をつく。だいたいあのわがまま娘をどうにかしようつてのが間違いだ。ああいう女は一度痛い目を見ねえとわかんねえんだ。自分がどれだけ恵まれた環境について、周囲に守られて生きていられるのかって。

俺はふと元の世界を思い出す。あそこは最悪のクソみてえな世界だった。俺には居場所がなかつた。成績とか世間体とか、そういうもんばつかりに価値を置くクソ親ども。いつも冷たい視線で俺を見下すクソ教師ども。ロボットみてえに親の言いなりになつてる優等生の兄貴。どいつもこいつもカスだ。

「あ、見つけたですぅ」

入り口からショコラが顔を出す。この屋上は俺のお気に入りだ。タバコがあれば最高なんだが、どいつもこの世界にはタバコはないらしい。学校の屋上が懐かしいぜ。

ショコラはスカートのフリルをふわふわさせながら歩いてきて、俺の隣へ腰掛ける。

「おい、仕事はいいのか？ 今レオナは飯食つてんだろ？」

「お食事中は給仕さんたちがいるからいいんです。レオナ様のお食事が終わるまで、自由時間なのですぅ」

そう、レオナ専属のショコラに個人で自由に使える時間は非常に少ない。一日三食の食事時と寝てる時くらいだろう。俺を見つけた時は、レオナに花を摘んでくるように言いつけられていたらしい。そんな時でないと外出さえままならない。まさにレオナのために生きてるようなもんだ。

「お前は飯食つたのかよ」

「うちは今ダイエット中ですぅ」

ショコラは二ゴニゴして頬に手を当てる。ショコラは巨乳だが、

全体的には幼児体型だ。でもそれは太つてるってわけじゃない。まあ「脱いだらすごい」のかも知れないが。

「なあ、お前腹立たないのかよ。あんなわがまま娘に付き添つてて「レオナ様はとても純粹でかわいらしい方ですう。みんな誤解してるのですう」

「誤解ねえ……」

俺はため息をついて夜空を見上げる。じうして仰向けになつて寝転んでいると、宇宙に吸い込まれちまうような気がする。昔から星は好きだった。

「レオナ様はお寂しいんですう。国王さまも王妃様もお忙しくてえ、昔から遊び相手もいらっしゃらないしー」

「遊び相手ねえ」

俺はあいつの玩具なのがもしけねえな。

「だから魔法でえ、いろいろな獣を呼び出して遊ばれてたんですう」

「あの化け物どもは、あいつの遊び相手かよ。すげえな」

今もまだケツが痛え。お陰で腹も減らねえし。

「でも最近のレオナ様は楽しそうですう」

シヨコラはニコニコして俺を見ている。あー、あれだ。俺といつ

玩具が手に入ったからだな。

「こつちはお陰で生傷だらけだつーの！」

「マサムネさんはあ、今までの執事さんと違つて我慢強いですう」

「はつ！ あんなんされたら、普通は逃げ出すわな！」

俺は逃げたくても逃げられない。だたそれだけのことだ。なにせミミズとかオケラにはなりたくねえしな。

「で、お前は何の用で俺を搜してたんだ？」

「あ、そうですう。エルザさんが搜してたですう」

「げつ！ あの女が？」

エルザとはエルザ＝アマンデイアといい、レオナ専属護衛の女剣士だ。身長は百八十センチ近くあり、褐色の肌に筋肉ムキムキのマツチョウーマンだ。何でも南方の国からわざわざこの国に出仕を申

し出できたらしく、その腕前は滅法強い。おれりくレオナの召喚獣ともいい勝負ができるだろ？

俺はあるの女が苦手だ。

「やべつ！ ショコラ、ここに俺がいる」と黙つてくれよな！」

「うーん…… でも見つけてしまったしね、つむぎは嘘つくなのはイヤです」

「後でお礼するから！ な？」

「うーん……」

ショコラは口を尖らせて唸つてゐる。俺はショコラの氣を逸らすこととした。

「そ、そういうえばショコラってフルネーム聞いてなかつたよな。俺当ててみようか？」

「ええ？ わかるんですかあ？」

案の定ショコラはのつてきた。俺はショコラのフルネームは知らないが、適当に言えれば気も逸れるだろ？

「ショコラ＝デニッシュコ！」

うは、超テキトー！ でも好きだからいいや。

ところがショコラは田と口を〇の字にして動きを止めている。

「な、なんでわかつたんですかあ？ 誰かに聞いたんですかあ？」

ぐはっ！ 当てちまつたよ！ つてか、名前までお菓子系かよ。

「あつ！ いた！」

入り口からぬうつと大きな影が現れる。俺はそれが誰なのか一発でわかった。

「お前、仕事をぼつてそこで何やつてんだよ！」

蛍光灯のような明るい月明かりの下、燃え立つよつた金髪と青い瞳。黄金の鎧に身を固め腰には長剣を下げている大柄な女剣士。

「げつ！ ハ、エルザ！」

エルザは入り口を塞ぐように腕組みをして俺を睨みつけている。逃げ道はあそこしかない。それがわかつてそこに仁王立ちしているのだろう。

「レオナ様が食事を終えられたるまで、本を部屋に運んでおけって言われたろう？ オレだけにやらせる気かよ…」

エルザは見た目にそぐわぬ言葉遣いは男っぽく、自分のことを「オレ」と呼び。それが妙に似合つて男前だから困る。

「ま、まだ時間あるだろ？ あいつはさつき飯食いに行つたばつかだぞ？」

「なんでも食事が口に合わなかつたとかで、もつ部屋にお戻りになつてるんだよ！ 本がないつて立腹だ！」

「くそつ、あんのクソアマ」

俺は立ち上がり後ろ頭を搔きながらエルザの方へ向かう。エルザはムッとした表情で俺に道を譲つたが、すれ違いざま俺の股間が驚掴みされる。

「うう…

「それと、レオナ様に対する口の利き方に気をつけるんだな。オレの目の黒いうちは、レオナ様に対する暴言は許さねえからな」

エルザは大きな手で俺の股間を強烈な握力で握りつぶそうとする。「うげっ、わ、わかった！ わかったって！ うがあ…」

エルザはにやつと笑つて俺の耳に口を寄せた。こんな野蛮な女でも、近づくといい匂いがする。

「レオナ様に手を出したらオレが許さねえからな。もしビリしても我慢できねえなら、オレがいつでも相手してやるぜ。カラッカラになるまで搾り取つてやるからな」

手！ 手を動かすな！ あ、ああ…

俺にMつ氣はなかつたはずだ。しかしエルザの手技はハンパない。抵抗する気力そのものが萎えてしまう。

「あああ～、エルザさんだめですぅ！ マサムネさんをいじめは、うちが怒るのですぅ！」

俺とエルザの周りを、シヨコラが腕をわにわに動かしながら走り回る。

「その割りには反応してるぞ？ おらへ、うつうつうつうつ…」

い  
ス  
！  
」

「アーティストの才能を發揮するためには、自分自身の才能を発揮するためには、

俺は遠くなる意識の向こうに、栗色の花畠を見た。

## 第8話 フィオーナのお願い

「よつこじょつと！」

我ながらオヤジ臭えと思いつつも、声を出さずにほいられない。エルザに悶絶させられた後大量の本（しかも全部ハードカバー）を運ばされ、腰がめりめり言つていて。体力にはそこそこ自信はあるが、もともとやる気がないだけに疲労は一倍だ。

しかし、どうしたもんか。あのわがまま娘を淑女にするなんて、絶対無理だとしか思えない。さつきだつて頭三つある犬の化け物……ケルなんとかつてヤツに追い立てられたし。お陰でエントランスと三階にあるレオナの部屋を何往復も走つて運ばされた。

「くつそ！」

俺は風呂上がりの濡れた髪を、わしゃわしゃとかき乱す。こういう時マンガとかテレビがあれば気を紛らわすことができる。ケータイでもいい。アプリとかやってれば、少しば嫌なことを忘れられる。でもこの世界にはそんなものはない。せいぜい小難しい本くらいだ。俺は絵のない本は大嫌いだ。一ページ田で寝られる自信がある。

だからいつも寝るしかすることがない。

「はあ、明日は数学の家庭教師が来るんだつけな……」

レオナが暴走しないように、その間付き添つてないといけない。お茶やお菓子を出したりつて仕事もあるし。

「ふあ……」

慣れない執事生活のためか、最近はベッドに横になるとすぐに眠気が襲う。宵つ張りだつた俺も健康的になつたもんだ。

俺の部屋はメイドや執事などが使う使用人用の部屋だ。両隣は国王付きの執事と秘書官。どちらも中年というには若く、青年というには歳を取つている。三十くらいか？　はつきり言つて話をしたこともない。するヒマもねえし。

忙しいのか、どちらも部屋に戻るのは遅い。遠くでドアの閉まる音を聞きながら、俺は夢の世界へ墮ちていった。

むに。

「ん……」

むにむに？

ん、なんだ？ 何か柔らかいものが俺の顔に……

むにゅうつ！

「うわっ！」

俺は起きあがるとして巨大な柔らかい物体に押さえつけられる。同時に香水らしい匂いが鼻孔を満たし、息も苦しくなる。

「あら、起きてしまわれたんですね？」

「、この声は……」

懸命にずり上がってその巨大な柔らかい物体から頭を出すと、そこにはあの妖艶な王妃フイオーナだった。ってことは俺を窒息させようとしているこの物体は……

「あん、マサムネさまの吐息がくすぐったいですわ」

ち、乳か！ 押しのけようとした俺の手が空中で止まる。触つたら大問題だ。いや、思いつきり顔が埋まってるけど。

「な、なんすか？」

「あらあ、こんな夜中に殿方の部屋に来た理由を女に聞くなんて野暮ですことよ？」

フイオーナは艶めかしく赤いルージュの引かれた口角を持ち上げる。俺の防衛本能が「喰われる」警告を発している。健康な男子高校生であるからには女に興味がないわけではない、いや、正直興味津々だ。右手以外の彼女ができたことは今までないが、それ相応の知識はある。

それでも王妃なんて立場でしかも熟女は俺の守備範囲外だ。いか

に美人でいい身体をしていたって、人妻に手を出すほど飢えちゃいねえ。

「ま、ま、待つてください。は、はな、話せばわかりますー。」

「あらあ？ 何か素敵なお伽話でもしてくださるのかしら？ ふふ、雰囲気を盛り上げるのにはいいわね」

そういうとフィオーナは漸く俺の上から豊満な身体をどかしてくれた。

フィオーナはシースルーのナイトドレスを身に着けており、その下の黒い下着が丸見えだ。エンジ色の裾の長い上掛けを羽織っているが、前面をがばっと開けているために何も隠せていない。

俺は「ぐりと唾を飲み込み、何を話そうかと思案を巡らす。

「お、王妃様はレ、レオナをどう思つてるんすか？」

「レオナ？」

フィオーナはきょとんとして忙しく瞬きを繰り返す。いきなり娘のことを持ち出されると、思つてもみなかつたんだが。よし、何とか気を紛らわせることができたぞ。

「あの娘には不憫な思いをさせて済まないと思つてるわ。本当は優しいいい娘なのに」

フィオーナはショコラと同じことを言つ。俺には、どうもそのレオナに対するその評価が解せない。

「優しいいい娘っすか……俺にはとてもそんな風には思えないんですけど」

「あの娘のわがままは、甘えの裏返しなんです。そこはわかつてあげてくださいね」

「裏返しねえ」

俺が死ぬ前にわかつてあげられればいいがな。

「あ、そりそり、いいこと教えてあげるわ。あの娘、腐女子なのよ」「はあ？」

今度は俺がきょとんとする番だつた。腐女子って聞いたことがあるぞ？ 確かホモとか同性愛とかが好きなオタクのことだろ？ あ

れ、違うか？ ってか、何でこの世界にそんな言葉があるんだ？

「B級小説とか漫画とかあの娘の部屋にたくさんあつたの見た？」

俺は激しく首を横に振る。あいつの物に触れただけで、俺のケツ

は三つにも四つにも割れちまうぜ。

「あなたがさつき運んでた本。あれ全部B級物よ」

「ところでB級てなんすか？」

フィオーナは大きくため息をつく。

「そこから説明しなきゃならないのね。B級はボーアイズラブの略で、男の子同士の恋愛をテーマにした創作物のことよ」

「ぶつ！ ホ、ホモっすか？」

「そう言つちゃうと身も蓋もないけれど、まあ似たようなもんね」「わつけわかんねえ」

「あ、でも勘違いしないでね。そういうのが好きってだけで、男の子に興味がないわけじゃないから」「でもなあ……」

俺にははつきり言つて理解できない分野だ。別に他人の趣味にいやかく口を出すつもりはないが、いつしょに楽しむことはできない。「そうそう、実は今夜はあなたにそのことでお願いがあつて来たのよ

「お願い？」

フィオーナは二口一口しながら頷ぐ。

どうやらそれが本来の目的で、俺に夜這いをするつもりはなかつたようだ。……たぶん。

フィオーナのお願いというのは、確かにレオナに振り回される俺にとつては一つの転機になりそうな話だった。俺はフィオーナのお願いを快諾し、形のいい尻がドアの向こうに消えるのを安堵と未練半々の気持ちで見送ったのだった。

## 第9話 マーケットと傭兵国家

「そこの野獸」

「レオナ様、できれば名前で呼んでいただきたいのですが」

「あらそう、ではヒポポタマス」

「レオナ様、それは人間の名前ではありません」

「じゃあ、略してヒポタマ」

「いえ、なぜ略すのかわけがわかりません」

今日のレオナはどうやら機嫌がいい。その理由はわかつていた。

母親である王妃フィオーナから俺にお願いされた件だ。

「で、私になんのご用でござりますか？」

「ヒポタマのくせに人語を解するあなたの意見も聞きたくて。お出かけにはどれを着て行つたらいいかしら」

「そうですね、この薄緑色のロンングドレスなどいかがでしょうか」

「これね。ではこれは捨てましょう」

「んな？」

レオナはそのドレスを丸めてポイする。ムカッ！ いかんいかん、せっかく機嫌がいいのにここで俺がキレたらぶち壊しだ。

フィオーナのお願いとは、レオナを隣国のマーケットに連れて行ってほしいということだった。マーケットとは市場のことだが、今回のマーケットとはどうやら世界各国から集められた本の展示即売会だという。俺の元いた世界の言葉でいうところの「コミケ」ってヤツだ。

レオナの好きなB-L本やショタコン本は、普通の書店では売っていない。もともとの世界では、書店自体ない。国営の図書館のような施設はあるらしいが、当然“お堅い”本しか置いてない。

先日大量に持ち込まれたB-L本は、どうやら隣国のレオナの友人が送つてくれたものらしい。

つまりレオナにとって今回のマーケットは、自分の欲しい本

を自分で欲しいだけ選べて買えるまさに夢のよくな機会なのだ。

俺はレオナの引率兼護衛をフィオーナにお願いされた。当然ショコラとエルザも同行するが、女ばかりでは不安だということで、ラグラーンジエ王が渋つていたらしい。しかし俺が付いていくということで、晴れて外出の許可が下りたのだ。

お陰でこの始末だ。

「ヒボ

「レオナ様、省略し過ぎです。もはや跡形もありません」

「靴はどれがいいでしょう？」

レオナの前には高いヒールの靴からパンプスと言つていよいよ靴まで、十足以上並べられている。

「マーケットと言つてもいわゆるコミケ。俺はオタクではないから、コミケなんつーものに行つたことはねえ。何となくテレビとかで見知つただけだ。

でも広い場所でたくさんのブースがあつて、様々な物が売られているというイメージがある。そうなれば歩きやすい靴、動きやすい服装の方がいいだろう。

それに例の噂がある。

「高いヒールの靴は止めた方がいいでしょう。おそらくたくさん歩くでしょうから」

「あら、タマのくせに割とまともなことをほざくのね。不愉快だわ」

「レオナ様、それはすでに猫の名前です」

「不愉快」といいつつ、顔は本当に楽しそうだ。身体にまとわりつく音符が見えそうだ。何の曲かわからないが楽しげに鼻歌を歌いながら靴を選ぶその横顔は、十六歳という年相応のかわいい女の子そのものだった。とても普段高慢ちきな態度と行動で、周囲にわがままを振りまく王女様には見えない。

その噂を最初に聞きつけたのはエルザだった。

エルザはもともと南の方の国出身ということで、国外にも知り合いが多いらしい。ハンジエルティアに来る前の話はあまりしたがら

ないが、顔の広さでは国王にも負けないほどだ。

そのエルザの情報網に、不穏な噂が引っかかった。

エンジエルティアはとても平和な国で、ここ何百年も戦争や内紛など起こったことはないらしい。築城の文化がないのはそのためだ。もちろん山賊や強盗団などの犯罪者はいるが、王様のいるこの館の周囲は広大な山や野原だ。その空間自体が防壁となる。過去、このお館に侵入しようとして成功した盗賊はいない。

ドラゴンを始めとした数々のモンスターの餌食になってしまふからだ。

このお館の周りの土地には、野生の猛獣やモンスターが放たれているらしい。俺が見つかった野原はまだ安全な場所だが、あそこから見えた森の中には凶暴なモンスターや獸がうつようみいたようだ。俺は後でそれを聞いた時、かなりビビッた。

そういう事情もあってこの国はそこそこ平和な国なのだが、周囲の国はそうではないようだ。

マーケットが開催されるのは隣国「オバマ」。どこの大統領だと思つたが、本気でそういう名前の國らしい。オバマとエンジエルティアは細い海で隔たつており、両国の行き来は船でしかできない。それが幸いしてエンジエルティアは平和なのだが、このオバマという国が非常に物騒な国のようなのだ。

「ねえバカ、上着はどっちがいい？」

「レオナ様、逆になつています。せめて動物の名前にしてくれださい」

「ほほほ、幽霊の正体見たり枯れ尾花」

「なんでそんなこと知つてんすか」

オバマは強力な傭兵によつて国を支えている「傭兵国家」だった。

そしてレオナがマーケットに行くといつ噂をどこから聞きつけ、誘拐を画策している一団がいるらしいというのだ。

エルザは先にオバマへ旅立ち、情報収集をしている。俺とショーラは明日レオナといつしょに出発し、向こうでエルザと合流することになつてゐる。

「ねえタ」

「今日は魚介類ですか」

俺はその噂がガセネタであることを祈っていた。

## 第10話 大空へ

「ベクレルう！」

ショコラが両手を広げて空を見上げる。青いウロコをきらめかせながら、ブルードラゴンがグライダーのように滑空する。これどう見ても特撮かCGでしかあり得ない光景なんだが、すでに慣れつつある自分が怖い。

本日は快晴、気温は暑くも寒くもない絶好のお出かけ日和。俺は荷物の詰まったリュックを背負い直し、斜面の下方を見る。そこではレッドドッグのブルトニウムがレオナとじやれてい。どうでもいいが、こいつらの名前どうにかなんねえかな。

「マサムネ！」

俺の心臓が跳ね上がる。レオナが嬉しそうに、本当に嬉しそうに優しく俺の名前を呼んだ。レオナの執事になつて初めて名前を呼ばれた。それだけ。たつたそれだけなのに、俺はドキドキして頬が緩むのを感じた。

「んん、こ、こほん！ な、なんですかレオナ様」

「マサムネ！」

「わん（キリッ）」

ぶつ、犬（眉毛付き）の方かよ！ レオナは足下で腰を振るマサムネ（犬）の前足を抱き上げ、鼻面に頬ずりしている。俺はがっくりと肩を落とす。

「わんわん（キリックスツ）」

「ああ～！ また笑いやがったあのクソ犬！」

俺は腕まくりをして、マサムネ（犬、いまだに腰を振つている）に向かつてずんずんと歩き出す。

「ああ～、マサムネさん！」

ショコラが背後から声を掛けてくる。うつせ！ 僕はもう我慢ならねえ。あのクソ犬に、人間様の恐ろしさをたつぱりと教育してやらねえ。

らねえと。

どうせ出発したら一、二日は戻つて来られねえ。躰はタイミングが大事つてね！

直後、俺の上に

俺は堪らず地面に押し倒される。硬い何かが俺を地面に押さえつ

「アカデミー賞受賞作『黙殺』」

どうやら俺はベクレルの着地点を横切っていたようだ。ベクレル

「おおやあ、い、ど、どさ、おおやあ！」

俺の顔は押しつけられるウロコで奇妙に歪んでいく。

俺の頭の上で、レオナの高笑いが聞こえる。俺は必死に両手を動かそうとするが、ベクレルの巨体でまったく動かすことができない。つてか、王女が脱糞とか言うな！

-  
わん！

するとマサムネ（犬、表情は見えない）が一声吠える。すると俺の上に掛かっていた重さが消える。ベクレルが身体を持ち上げたらしい。俺の言うことは聞かねえくせに、犬のいうことは聞くのかよ！「くっそ、このクソドラゴン！」ちゃんと安全確認しやがれってん

た  
！」

わんわん！（メジ！）

よつて吠える。

「あはは！」犬にまで叱られてますわ。」の正義感以下の中等生物は

「ムカツ！」

俺はマサムネ（犬、キリリと眉を持ち上げて）いる。ちよつと凜々

しきとか思つてしまつたのは内緒）と睨み合つ。

「お待たせしたね」

そこに王様と王妃様が、護衛の兵士たち五人ばかりに囲まれて現れる。

「お父様！ この度はお出かけを許可してくださいまして、本当にありがとうございます！」

レオナは駆けて行つて、ラグラランジエ王の首に抱きつぐ。いいなあ、あれ。

「おうおう。レオナ、気をつけて行つておいで。オバマのレンドルフ公爵には、くれぐれもよろしくお願ひしてあるからね」

「はい！」

レオナは満面の笑みで頷く。

今日のレオナは、今までと一風変わつた出で立ちをしている。レモン色のブラウスにエンジ色のボレロ。膝上五センチくらいの白いミニスカートに、雪のように真っ白いロングブーツ。横には同じく白いポンポンが一個ずつ揺れている。ストレートロングの金髪は縛らずに流しているが、真っ赤な力チューシャをしてばらけないようになっている。あれはどう見てもキューティハ……「じほんじほん」とにかく活動的なのは言うまでもない。俺は目の前でちらつくレオナの白い太ももをチラ見しながら、王妃様の方へ近づく。

「王妃様。例の件、エルザから何か連絡はありましたか？」

レオナに聞こえないように、小声で聞く。フィオーナ王妃は形のいい眉根をほんの少しだけ寄せて、小さく首を横に振る。

「とりあえず、大規模な盗賊や強盗団の動きはマークさせています。でも個人や少人数で動く傭兵の動きは皆田見当もつきません。後はあなたとエルザに頼るしかありません」

「ま、ガセだと思いますけどね」

王妃は俺の言葉に苦笑して、視線を逸らす。レオナが近寄つてきたのだ。

「こら外道、お母様に近づくんじゃないわよー！」

「レオナ、そんな言葉遣いはおよしなさご。今回お出かけでれるようになつたのは、マサムネさんのお陰なんですから」

「わん！（得意げにキリツ）」

「お前じゅねえ！」

「は、はー。でも……」

レオナは俺を不審な目で見る。どうでもいいが、美少女ってのはどんな表情しても綺麗なんだよな。きっと、鼻くそほじっても綺麗に違いない。

「なあに？ 何か不安でもあるの？」

「この野獣のような野蛮な男に、わたくし変な！」とれたりしないか心配なのです」

「んなつ！」

「お～ほ～ほ～ほ～ 心配しなくていいわよ。その辺はエルザとシヨンラが、しっかりと見張っていますから」

「はいですう～！ お任せくださいですう～！ マサムネさんがレオナ様に何かしよひとしたら、うちがちょんざりやけりやう～！」

「な、なにを？ 何をちょんざりやけりやう～？」

俺は下腹部に危険を感じた。

「では道中気流が激しいところもあるだらうから、振り落とされないよにな。ま、マサムネ殿以外は心配いらぬだらうが」

オバマまではドラゴンで一時間つてところらしい。一般人にはあり得ないが、エンジニアルティアの王族だけはドラゴンを乗用できる。今回は行き帰りの安全面と時間短縮を考えて、ドラゴンで移動するようになったのだ。

俺はショコラといっしょにベクレルに跨る。レオナはいかにも慣れた風で、フルトーネウムに乗つて手縄を搔い繰る。

「マサムネさん、しっかりと抱まつているですか

「お、お！」

馬さえ乗つたことのない俺にとっては、いかに巨大なドラゴンでもかなりビビる。それでもショコラの小さな腰に腕を回すと、少し

は安定できた気がした。

「じや、しゅっぱあ～つ！」

レオナが楽しそうに叫ぶと、プルトニアムは陽光きらめく青空へと勢いよく羽ばたいていく。その様子を、目を細めて眺めてみると体が一瞬沈む。次の瞬間内臓が全部下方へ引っ張られ、俺の耳には「づづづ」とした風の音しか聞こえなくなる。

「うわあああ～！」

俺とショコラを乗せたベクレルは、大空の真っ只中へぐんぐんと上昇していく。

## 第1-1話 グリフロンと共に

鳥が空を飛ぶ原理は授業で習った氣がするが、飛行機とは異なるものだつてのはよくわかる。俺が今までに、体験しているからだ。「ぐあつ、へあつ！」

「マサムネさん、うるさいですぅ。少しは景色を楽しむですか」「そ、そやは言つても…… あげつ！」

“羽ばたく”とこゝのはある意味、空気の塊を羽で掴むのに似ている。ベクレルが羽ばたくたび、胴体が大きくホップするのだ。翼を持ち上げればフリー・フォールのように落下する。羽ばたけばロケットのように急上昇する。

俺はさほど時間を掛けずに、乗り物酔いになると戻つた。いや、この場合“ドラゴン酔い”か？

「マサムネさん、ベクレルの動きに体を合わせるですぅ。慣れれば気にならないですよ」

「慣れればって、そ、その前に死ぬ

遠くにさきらとした海が見える。とてもじゃないが、下を見る余裕はない。俺は高所恐怖症ではないし乗り物酔いをしやすいわけでもないが、椅子もなく動物に両足で跨つただけの状態で景色なんか楽しめるわけがない。

「おわつ！」

そんなことを言つてる間に、俺の体がズレる。硬いウロコで擦れた内ももが痺れて、力が入らなくなってきたためだ。むにゅ。

「きやん！」

俺の右手が、信じられないくらい柔らかい塊を薦摺みしている。振り落とされないように必死な俺には、状況を確認する余裕なんてない。そう言つてる間に体がぐんと上昇する。

「あわつ！」

。あ、はんか辰巳二一がね。

俺は右の手のひらに握った物体を、指で揉んでみる。  
むこむこ。

「や、やああ……ひひ、胸は弱いんだす……」

17

「マサムネさんって、意外とダイタンですか……」

俺の右手は、シミ一斗の豊満な胸を駆けめぐらして、シミ一斗は手綱を握った両手を桃色に染まつた頬に当て、いやいやをしている。硬直した俺は、次の瞬間両手をショコラから勢いよく放す。

ちよつと待て。何でベケレルの“腹”が見える？

「どわわわあー！」

体全体を包み込む浮遊感。いや、違う。

お、落ちてんじやねえかああああああああああああああ

「マサムネさん！」

ショコラが慌てて手綱を引き、ベクレルを旋回させている。しかしその姿もあつという間に小さくなつていく。耳をつんざくような風の音しか聞こえなくなり、体中の血が頭に上つてくる。俺は逆さまになつて、地上へぐんぐんと近づいていた。

ああ…… この世界に来ても、俺の人生はろくなことなかつたな…… 僕はこのまま地面に叩きつけられて、潰れたトマトみてえにぐちゃぐちゃになつて死んじまうんだろうな。

結局俺は、そういう運命かよ。ハゲジジイにチャンスもらつたはずなのによお。せめて生まれ変わつたら、ミミズとかオケラじゃねえことを祈るか……

いわゆる自由落下をしていると、景色は止まって見える。本当はものすげえスピードで墜落してんのに。頭の上には天井のように、元のまま空とか飛べたら楽しいのによ。

そんなことを考えていたら、急に口が窮屈。途端にがくんと落下が止まり。上下が元の状態に戻る。見る間の上着が持ち上がりついて、へそが丸出しになる。って、これは……

「ほほほ！ セクハラなどをしているから、バチが当たったのよ！ いつそのまま潰れて死ねばよかつたのに」

「て、てめ！ ……いや、レオナ様」

俺の横には青いドラゴンに跨ったレオナが、豪奢な金髪を後ろへ吹き流しのように靡かせながら飛んでいる。

「でもあなたが死んだら、わたくしがマーケットに行けなくなってしまうわ。だから“しおうがなく”助けてあげるわ」「助けてって……」

力強い羽音がして、俺はおそるおそる見上げる。

「くえええっ！」

「ぎええええっ！」

そこには嘴の先でリュックを咥えたモンスターが、ぎろりと俺を睨んでいた。

「お～ほつほつほ！ グリフロン、そいつがわたくしに生意氣なことを言つたらそのまま落としておしまいなさい！」

「や、やめる！ ジヤなくて、おやめくださいレオナ様！」

「お～ほつほつほ！」

「くええええっ！」

前半分が鷲、後ろ半分がライオンという異形のモンスターは、レオナ得意の召喚獣だらう。ドラゴンよりは一回り小さいが、その分小回りは利きそうだ。

「マサムネさま、無事でよかったです」

「ショコラ、セクハラは大丈夫でしたか？」

「はい、ですう。マサムネさんは意外と大胆ですう」

ショコラは恥ずかしそうに、赤らんだ頬を両手で覆う。

「わああ、違う違う！　あ、あれは事故で」

「ふうーん……　お前は事故を装つて女の子の胸を揉みしだくよう

な、ド変態セクハラ野獣だつたのね。知つてたけど」

「違う違ううう！」

しかし実際ショコラの胸を触つてしまつた手前、強くは反発できない。しかも宙づり状態だし。

「罰として、オバマまでその状態で逝きなさい」

「い、今違う意味で言つた！　“逝きなさい”つつた！」

「お～ほつほつほ！」

眼下はすでに、真っ青な海ばかりが広がつてゐる。遠くに灰色の山嶺が見えてきて、俺は腹丸出しのテルテルボウズ状態でそこへ向かつて輸送されていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2623y/>

---

エンジェルティアの最強執事

2011年11月29日22時45分発行